原始仏教における笑と泣

柏原信行

南方上座部の論書は、心を八十九種（詳細には百二十一種）に分ける。その中には笑起心（hasituppāda-citta）あるいは笑心（hasana-citta）と名づけられる心がある。

凡そ、笑いを生じさせる心には十三種がある。凡夫・有学・阿羅漢・仏等各々に笑いを起こさせる心には、共通の心もあるが、固有の心もある。凡夫には喜倶善心と喜倶不善心の各四心、有学には喜倶善心の四心と喜倶悪見不相応心の二心、阿羅漢と独覚には善唯作心の四心と笑起心、仏には喜倶智相応善唯作心が笑いを起こさせる。これらの心うち、笑起心は、阿羅漢にのみ笑いを起こさせる心である。その笑いは、髑骨や餓鬼といったつまらぬものを見た時に生じる笑いである（Vism. p. 457; As. p. 294; Abhidh-av. p. 13; Vism-mhṭ Nāgarī-ed. ii. pp. 1018～19）。モッガラーナ比丘の、空中を行く髑骨がハゲタカ・トビ・カラスなどにつつかれて叫んでいるのを見た時の微笑（Vin. iii. p. 105; S. ii. 255）もそれである。

また、中部の中の陶師経の中では、仏陀が前世のことを思い出して笑ったという記述が見られるが（M. ii. p. 45）これについての注釈書は、前歯を見せて笑った、とする。

インドの修辞学の書、Sāhityadarpaṇa や演劇理論書 Bharata Nāṭya Śāstra は六種の笑い方をあげる。㈠眼だけ（sita）、㈡少し歯を見せる（hasita）、㈢軽く声を出す（vihasita）、㈣肩と頭をふるわせる（upahasita）、㈤涙を流す（apahasita）、㈥全身をゆする（ati-hasita）。これらのうち、㈠と㈡は聖者、㈢と㈣は普通の者、㈤と㈥は低級な者の笑い方であるとされる。南伝上座部で言う笑い（hasita）は㈡である。

漢訳経典類では、仏陀の笑いは、六度集経巻六（大三－三五ａｂ）、僧伽羅刹所経巻中（大四－一二九ｃ）、大般若経附属品（大七－九一七ｂ）、観経発起序、月灯三昧経巻三（大一五－五六六ａ）、智度論巻七（大二五－一一二ｂ～一一三ａ）、等に、また菩薩の笑いは、華厳経八十巻中巻五十九離世間品（大一〇－三一一ｂ）や、金剛頂瑜伽中略出念誦経巻一（大一八－二三〇ｂｃ）、金剛頂一切如来真実摂大乗現証大王経（大一八－二一〇ｃ～二一一ｃ）、金剛頂瑜伽略述三十七尊必要（大一八－二九三ａ）等に見られる。これらはいずれも微笑である。そして特に大乗経典では、慈悲の象徴として扱われる。

倶舎論巻十一（大二九－六〇ｂ、Abhidh-k. p. 525）、順正理論巻三十一（大二九－五一九ｂ）、婆沙論巻百十三（大二七－五八五ｂ）には楽変化天の笑いが、また、倶舎論巻二十一（大二九－一一〇ｃ、Abhidh-k. p. 329）、順正理論巻五十五（大二九－六四八ｃ）、婆沙論巻四十八（大二七－二五〇ｃ）に掉挙蓋の食としての戯笑が述べられる。これら北伝阿毘達磨は、仏菩薩の微笑については述べず、専ら良からぬものとして扱う。

律は、笑いについても細かく規定する。南方座部は、笑いながら室に入ったり歩いたり坐ったりしてはならないとし（Vin. ii. p. 213）、また大衆部のものとされる摩訶僧祇律巻二十一では、歯ぐきを出し歯をむき出しにして笑ってはならないし、笑いそうになれば、無常・苦・無我であると観じ、あるいは死想により、ま

た舌をかんで耐え、耐えられぬ場合は衣の端で口をおおってゆるやかに抑えよと説く。

笑いの対局にあると言える泣くことについてはどうであろうか。泣き悲しむことの分類が仏典の中に見出される。苦聖諦あるいは縁起の説明の中愁・悲・苦・憂・悩である。これは㈠死ぬ様な苦しみに焼かれ㈡それに耐えられずに泣き㈢病患の苦しみであり㈣その心中の苦しみであり㈤愁等の増大によって呻吟することである。特に泣くという点では悲が相当する。その他は、特に親族を失なった時などの悲しみに関して説かれる(D. ii. p. 306; M. ii. pp. 106 f., iii. pp. 249〜50; S. ii. p. 1; Vism. pp. 503〜506; 法蘊足論巻九（大二六－四九八ａｂ）。

また、輪廻の苦を説く場合にも、無始以来有情が、親・兄弟・子供・眷属の死、或いは財産を失くしたり病のために流し続けた涙の量は恒河の水や四大海水の水よりも多かったと説く。(S. ii. p. 179; 雑阿含巻三十三（大二－二四〇ｃ〜、三〇一ｃ〜)、増一阿含巻四十九（大二－八一四ａ〜)。

仏陀の槃涅槃の時、有情は大いにうち悲しんだが、煩悩を滅した諸天やアヌルッダ等の仏弟子は、泣き悲しまずに耐えたとされる。それは、諸行は無常であってそうでないものはなく、又、生じ存在し造られたものはすべて壊れるのであり、そうではないということはない、といった確信によるのである。また仏弟子であっても泣いたとされるアーナンダについても、静かに仏陀に気付かれぬように泣いたとされる。(D. ii. pp. 140, 148, 151)

泣くことが苦の象徴であることは、増一阿含巻三十四（大二－七三九ｂ）の涕(啼)哭地獄や、正法念処経巻七・十二・十三(大一七－三五ｂ・三六ａ・六六ａ・七二ｂ）の涙火出処という地獄の名称にも表われている。律では、摩訶僧祇律巻二十二（大二二－四一一ｃ)、同巻三十四（大二二－五〇五ｃ)、四分律巻二十一（大二二－七一二ａ)、毘尼母経巻六（大二四－八三八ａ）に、水中・生草の上、房舎講堂の壁、塔の近辺に涕唾せぬように説かれているが、これは、涙や泣く事とは関係なく、鼻水を指す。

原始仏教で強調されたのは、無常・苦・無我である。泣くということは、これらのうちの苦を示して余りある。そのため、経典は苦しみや悲しみを強調し、律では制限せず、泣くのは無益なことである（Sn. v. pp. 582〜586; iii. pp. 169 f.）とか、小児が泣くことを力とする（A. iv.p. 223）という程度の表現のみである。

しかし、泣くこと自体は、笑いと同様、推奨されるべきことではない。三十二身分の一の涙は、大笑いや泣き悲しむ事や特別の食物や眼中の塵によって出るとされ（D. ii. p. 293; Khp. p. 2; Vism. pp. 261〜263)、笑う時にも泣く時にも、不浄物たる涙が流れる。そして、相応部には哄笑は子供のする事であり歌は泣くのと変らぬ（A. i. p. 261）と言われ、又、笑いと泣くことは異性を縛る八相のうちに数えられる（A. iv. p. 196)。

笑いは大乗仏教では慈悲の象徴となる。又、仏菩薩の微笑のみが肯定されていたが、禅の呵々大笑や十一面観音の大暴笑面では笑いに対する態度も変る。

泣くことも、観経では韋提希の悲泣雨涙も号泣も否定はされない。又、園城寺の泣不動の如く、苦の象徴から慈悲の象徴へと転化されるのは、我が国での無常観が原始仏教でのそれとは異なることに相通ずるのであろう。